
レイニー・レイニー

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイニー・レイニー

【ZPDF】

N1206E

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

外はどしゃぶり。幼馴染の彼は相変わらず傘を持ってない。

かれこれ10分近く経つだろうか。

ビリビリ。

思い切った決断もできないまま、下駄箱の影から激しく降る雨に足止めされている人物を盗み見る。

そのまま脇を素通りするのも気が引けるし、だからといって話しかけるのも……。

しかし雨脚が弱まるのを待っているだろう彼に救いの手を差し伸べる他の人影は見当たらない。帰宅部の連中は帰ってしまっているし、部活のある人はまだ部活中。ちょうど生徒が帰るピークの中間だ。

クロちゃんつてば、また傘持つてこなかつたんだ。

昔から朝に降つてないと邪魔だからつて……今日の降水確率80%だつたのに。

後ろ姿から幼馴染の顔は見えない。

幼馴染といつても高校生にもなると疎遠になりがちで、話しかけるのは躊躇われた。中学に入つて照れ臭さから話さなくなり、高校に入つてからは幼い頃とはまるで違う相手にどういつ反応をしたらいいのか分からず 最後にまともな会話をしたのは果たしていつだつただろうか。

……クロちゃんは人気があるからなあ。

君つていいよね。

そんな会話の中に幼馴染の名前がよく出てくれる」とくらこ広いネットワークを持たない自分にも分かる。

格好良くてスポーツもできて頭もそれなりに良い。明るいからいつも彼の周りに人がいる。

それに比べてあたしは。

典型的な優等生で、髪は真っ黒で、地味で、委員長なんてあだ名がつけられてしまいそうなタイプ。

小学生の時みたいに並んで歩く自信がない。だって誰の目から見ても不釣合いで、惨めになるのはあたしだから。

……でもなあ。

いつまでも止まない雨を眺めている幼馴染を放つておくなんて無理だ。

「クロ……」

クロちゃん、と呼ぼうとして躊躇した。

小学校の時の大名で呼ばれるのは嫌じゃないだろうか？

しかし時既に遅く、クロちゃんこと久朗は振り返つて、こちらを見ていた。ぱちりと目が合ひ。

「……ちー」

こちちは躊躇したのにも関わらず、相手はさりと幼い頃と変わらない愛称で呼んでくる。

懐かしいな なんて感想が浮かんだのは、やつぱりお互いに名

前を呼び合つようなことがなかつたからだらうか。

「……これ、使っていいよ。また傘忘れたんでしょ？　あたしロッカーに置き傘あるし」

「ずいと手を伸ばして傘を差し出す。

女子高生にしてみれば地味な水色の傘。

じゃあね、と言つて校舎に戻ろうと踵を返す。

ロッカーにある傘を取りに行こうと　その頃にはたぶん彼はもう姿が見えなくなつてゐるだらう。コンパスの差からいつても、足の速さからいつても。

「ちー、ちゅーと」

大きな手が逃れようとした手を絡め取る。

昔は同じくらいの大きさだったのに。小さくて柔らかい手だったのに。

引き止めるために繋がれた手は、じつじつとして、自分の手をすっぽりと包み込んでいる。

「今からロッカーに行くわけ？　どうせ帰る方向一緒じゃん。これで帰る」

大きな手は結局小さな手を逃がさなかつた。

恋人同士のようにぴったりと寄り添うのも恥ずかしくて　お

互いに片方の肩を少し濡らしながら歩いて歩く。

「あのわあ」

何を話せばいいのか分からずカチコチになつて居ると、上から声が落ちてくる。

「あんま寂しここと言つなよ。昔からひらがが傘を譲られた時はこれで帰つたじゃん」

……傘を貸して、別々の傘で別々に帰ることを寂しことて言つてくれるんだ。

「どつちかつて……クロちゃんがいつも傘持つてこなかつたんじやないの」

「だつて邪魔じやん?」

ああ、やつぱりそういうことは変わつてないんだ。

「クロちゃんのやつこいつとい、直した方がいいよ。誤解されちやうでしょ」

小学生の頃だつて一人で一つの傘を分け合つて次の日はクラスメイトにからかわれたものだ。
それが高校生になつた今なら間違いなく、そういう関係に思われるだらう。

「今更だろ、それこそ。昔からそつだつたじやん」

「……そうだけど、昔と今じゃ少し違つよ」

「どう違うの? 僕どちーが幼馴染なのはもう変えられない」とどうしよ

「そうだよ、そつだけど。

黙々をこねるみたいな言葉が出そつになつて、黙り込んだ。

幼馴染なのはもう一生変わらない。小さい頃と一緒に遊んでたのは過去のことだから、塗り替えることはできない。

「俺は面倒だし邪魔だから傘なんて持つてこない。ガキの頃からそうだつたんだから、もう直らないよ」

「なんですか、開き直りですか。

「……あたしはクロちゃんの傘じゃないんだけど」

見上げながら睨みつけると、くすくすと笑い声が聞こえる。

「嫌なら無視すりやいいのに。相変わらずお人よし。おまえもそういうとこ直した方いいよ」

「生まれついた性格は直らないよ」

「そうかもだけど 直さないと、こうこう悪い人に利用されちゃうよってこと」

悪い人って、自分で言つ?

そして暗にあたしが騙されやすいうつて言つてる?

「クロちゃんは別に悪い人じや 」

「悪い人なんです」

即答だった。

むう、と黙ると、真剣な声が耳元をくすぐる。

「昔から、ちーと相合傘で帰りたくてわざと傘を持ってこなかつたんだ」

耳に触れる吐息に顔が熱くなつた。
ちよ、それ、どういう意味ですか。

「だから、俺は悪い人なの。嫌なら今度からちゃんと無視するよつに」

そう言つて傘を手渡される。

気がつけばもうクロちゃんの家の前まで来ていた。あたしの家はあと数メートル先。

じゃあね、と言つだけ言つて逃げられた。

ズルイよ。そんな言い方。

肝心なことはなんにも言つてくれてないじゃない。

明日の降水確率20%。

また雨が降るよつて、逆をのべるべる坊主でも作らうつか。

(後書き)

珍しく現代恋愛モノで攻めてみました。
通学途中の電車の中で寝ながら思いついて、慌ててケータイにメモ
つたのはやはり雨の日でした。

てるてる坊主を逆さにして吊るすと雨にならうていうのは皆様知つ
ていましたでしょうか。我が家だけの迷信でないことを祈ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1206e/>

レイニー・レイニー

2010年12月10日01時09分発行